

G-1: 国際

開催日時・会場 9月3日(火曜日) 13:20-14:50 新C203(2階)

日本の大学・研究機関の国際化に向けたURAの役割

日本の大学および研究機関の国際化の必要性は久しく言われている。それを反映するように我が国の国際共同研究と関連が深い指標(国際共著論文数や高被引用論文数)は他国に比べ低調である。これに鑑み、2年前のセッション「研究の国際展開と学内環境—大学のグローバル化の中のURAの役割(※)」では、国際化に対するURAの役割は多様であり、研究者寄りの業務から部局や大学運営に至るまでの様々なレベルが存在するという問題提起のもと議論を行った。本セッションでは、その様々なレベルのうち、もっとも研究者寄りのレベルに注目し、具体的には「より多くの外国人研究者が日本の大学等で研究に従事してもらうために何ができるか?」について議論を展開したい。

先のセッションのとおり、研究者支援を行うURAの役割もまた多様であり、大学等での外国人研究者を支援するURAは、プレアワード(研究費申請等)、ポストアワード(予算執行等)の英語での支援だけでなく、日本語でのみ提供される情報の英語化にも対応している。例えば、多くの研究費の公募情報は未だに日本語のみであり、比較的整備が進んでいる科研費でも、英語版の公募情報は日本語のものより数週間遅れて公開され、採択内定後の諸手続きは未だに日本語のみである。また、研究費以外では、外国人研究者に必要な大学内での通知の多くも日本語のみである。これら「日本語のみ」の情報はすべて外国人研究者の支援を担当するURAによって英語化され、外国人研究者に提供されている。しかし、膨大な日本語のみの情報に対して担当URAだけで対応し続けるにはリソースが不足しており、また合理的でもない。

そこで、本セッションでは担当者の直面するこうした現状での具体的問題点を提示し、また限られたリソースの中での解決のためのアプローチ(例えば助成機関の公募情報の英語化や機械翻訳等の導入)について紹介し、海外からの優秀な研究者がより多く滞在したくなる大学等になるために何をすべきかを聴衆のみなさんと考えてみたい。

セッションの前半は全体の発表形式、後半にはいくつかのテーマごとに聴衆をグループにして、グループ内で各自の問題点等を発言していただく。最後にグループごとの発言をまとめて発表することで参加者全員での外国人研究者支援における問題点や、その解決策の共有を目指す。

※研究の国際展開と学内環境—大学のグローバル化の中のURAの役割

http://www.rman.jp/meetings2017/program/p060_F-2.pdf

オーガナイザー

西村 薫:東京工業大学 地球生命研究所 URA



Photo by Nerissa Escanlar

京都大学文学部卒業(言語学専攻)、ハイデルベルク大学短期留学コース修了(外国人のためのドイツ語学科)、パリ第7大学応用言語学部卒業(情報言語学)、フランス国立科学研究センター(CNRS)東京事務所アシスタント、東京大学生産技術研究所および医科学研究所URAを経て現職。省庁レベルから研究者レベルまで様々な国際共同研究の支援に従事。放送大学修士(学術)および東京農工大学技術経営修士。

磯部 靖博: 広島大学 学術室・研究企画室
リサーチ・アドミニストレーター



広島大学工学部出身。約10年の大学職員の経験及び弁理士の取得を機に、2012年11月からURA業務を始める。前職の山口大学では主に研究力分析(論文・科研費)を担当。2014年4月より現職。主に、全学の研究戦略及び自然科学系研究者・研究グループに対する研究プロジェクト申請・知的財産・国際連携・産学官連携の支援を担当。また、これまでの経験を活かし、強みとなる研究分野の特定や、新興・融合領域についての分析にも関与。

加藤 英之: 筑波大学 URA研究戦略推進室
副室長, チーフURA



1992年素粒子論で理学博士を取得(首都大学東京)、特別研究員PD(東京大学)。1994年より理化学研究所にて脳の情報処理の研究を始める。2002年よりニューヨーク大学で神経回路の数理的研究を行う。2005年に帰国し理化学研究所BSI 副研究室長を経て、2007年にBSI-トヨタ連携センターで研究室を立ち上げ、脳活動の精密計測に基づく脳型情報処理手法(AI)の開発を行う。2012年より現職。

講演者

トム・ガリー (Tom Gally):
東京大学 大学院総合文化研究科・教養学部 教授



1957年、米国カリフォルニア州パサデナ市に生まれる。カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校卒業(言語学専攻)、シカゴ大学大学院修士課程修了(言語学および数学)の後、1983年来日。1986年より日英翻訳、辞書編集などを本業とする。2002年より東京大学で教鞭を執り始める。現在は、大学院総合文化研究科・教養学部教授であり、2018年度学術英語学会において「ユーザーから見た機械翻訳の可能性と課題」について講演している。